

「さあ、続きをしてくれよ。ママの魅力的な口でぼくのものを喉の奥までくわえ込んで、奉仕してくれよ」

「ご奉仕しますわ・・・ご主人様」

「ふふふ、ママも奴隷の作法ができてきたじゃないの」

「鞭打たれて、浣腸までされて、わたし、あなたの奴隷なんだから、それは認める。心も体も認めている。息子の奴隷になっている淫らな母親よ」

綾子は智弘の股間に顔をうずめ、喉奥にまで二度の放出をしても固さの衰えない男根を愛おしそうに呑み込んでいった。

「勉強が終わったら、また可愛がってあげるからね。それまでぼくのものを舐めて待っているんだよ」

綾子は、肉棒を咥えたままこくりとうなずいた。

昨夜の残り香がベッドのシーツに染み込んでいる。母の愛液と智弘の精液が母子の汗とともにシーツに染みをつくっているのだ。智弘は、綾子の裸体を思い浮かべ、肉棒を勃起させた。そのまま、寝室のドアを開け、廊下を通り広いリビングに入ると、綾子はキッチンに立って朝食を作っていた。エプロンをした綾子の豊尻が

スカートの中でうごめくさまはセクシーだ。勃起度が高まって硬直したペニスが跳ねた。智弘はズボンをはかないで、下半身を露出したままなのだ。

「朝からいやよ」

綾子の腰を両手で抱いて、下半身をその肉感的な臀部に押し付ける。

「君は昨夜、何度私の中に放出したのよ。それなのにもうこんなに硬くしている」

そういつて綾子は急に赤面した。

「朝の挨拶代わりに、ママのアヌスを味わわせてくれよ」

「いきなりなの？」

「いやかい。ぼくの奴隷ママ」

「いやじゃないわ・・・ママは智君の奴隷ですわ」

「だったらお尻をもっと突きだしなよ」

「はい、どうぞお使いください」

綾子はキッチンに両手をつくと、臀部を突き出した。スカートがめくられ、パンティがおろされていく。薄いピンクのパンティが太股に絡まった。熱い肉棒が触れてくる。これで綾子は昨夜何度

もアナルアクメを迎えていた。

「君のこれは疲れ知らずだわ・・・なんてたくましいの」

綾子は智弘のペニスをそっと握った。びくっとはねて脈打つペニスは、少しも固さを失っていない。十代の若者の性欲の強さをあらためて綾子は思った。

「ママのお尻を征服してください」

キッチンで立ち姿でのアナル性交がはじまった。ヌチャッヌチャッと湿った粘膜がこすれる音が響きだした。